

ひんご遺跡 現地説明会の資料

一般財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 調査の概要

- ・ 調査場所：下水内郡栄村豊栄 2 1 5 3 - 1 ほか
- ・ 調査原因：長野県北信建設事務所による県道箕作飯山線建設工事
- ・ 調査期間：平成 27 年 7 月 1 日～10 月 31 日（予定）
- ・ 調査面積：1,870 m²
- ・ 検出遺構：縄文時代後期（約 3,500 年前：敷石住居跡 2 軒、竪穴住居跡 2 軒、配石 4 基、土坑多数）
- ・ 出土遺物：縄文土器（縄文時代後期、堀之内式～加曾利 B 式主体）、石器（石鏃・打製石斧・石皿等）、土偶

2 遺跡の立地

千曲川左岸（北岸）の標高 285m 前後の河岸段丘上の先端近くに遺跡はあります。縄文時代の地層は、千曲川の氾濫などで運ばれた砂や粘土で覆われています。現在の千曲川は約 20m 下を流れていますが、西大滝ダムができる前は水量が多く、谷を深くする浸食は早かったと考えられます。また、遺跡の川側（フランセーズの下）には数mの土が盛られています。そのため、縄文時代の千曲川は現在よりもかなり遺跡に近い位置にあったと考えられます。南向きの緩斜面で日当たりがよく、水場も近いことから遺跡の立地としてはとてもよい条件がそろっています。今回調査を実施した村道部分から北側の国道 117 号線にかけて遺跡の中心が広がっているようです。



ひんご遺跡遠景（南東側、千曲川対岸から撮影）

3 大量の縄文土器片が出土

遺跡の地表から深さ 1～1.5m 下に厚さ 20～60 cm の黒褐色の地層があります。この地層から、縄文時代後期（約 4,000～3,500 年前）の土器が大量に出土しました。ほとんどが破片ですが、接合すれば完全な形に復元できるものもみられます。土器は、形や文様から千葉県の堀之内貝塚と加曾利貝塚の発掘で名付けられた堀之内式や加曾利 B 式と呼ばれ



縄文土器の出土状況

ているものが主体のようです。当時の栄村が関東地方南部と共通する土器を使っていたことが分かってきました。土器のほかにも、石鏃や石皿などの石器、土偶の脚部などがみつかっています。

4 敷石住居跡を発見

竪穴住居跡の床面に石を敷き詰める敷石住居跡がみつかりました。敷石住居跡は、鉄平石などの平たく角ばった石を一般には敷き詰めますが、ひんご遺跡で発見された例は、平たく円い河原石を用いています。住居跡を上から見た形が、柄のある鏡(手鏡)に似ていることから「柄鏡形住居跡」とも呼ばれています。

今回の調査例では、柄にあたる部分に石が敷き詰められ、鏡面の部分にあたる床面の縁に沿って石が並べられています。しかし床面部分には敷石がみられず、中央付近に石を四角く組んだ立派な炉跡がみつかっています。



敷石住居跡

5 まとめ

長野県は、縄文時代中期（約 6,000～4,000 年前）の遺跡が多い地域として知られています。環状集落など規模が大きな遺跡もあり、当時の日本列島で人口密度が高かった地域と考えられています。ところが、縄文時代後期（約 4,000～3,000 年前）になると大規模な遺跡は姿を消し、数も減ります。その原因は寒冷化等が考えられていますが、はっきりとわかっていません。

ひんご遺跡周辺では、飯山市東原遺跡や野沢温泉村岡ノ峯遺跡などの縄文時代後期の発掘調査がおこなわれています。まだまだ発掘事例は少なく、当時の生活のようすや文化の特徴など、よく分からないことがあります。

今回の調査は、栄村で初めての本格的な発掘調査となりました。千曲川左岸の上流にある飯山市では 324 遺跡、下流の津南町では 340 遺跡が、遺跡地図に掲載され、道路建設や農地整備事業などの開発に伴い多くの発掘調査がおこなわれています。昭和 50 年代に作られた栄村の遺跡地図には 46 遺跡が掲載されていますが、開発も少ないこともあって、遺跡数は増えていません。それらの市や町とよく似た地形や気候を示す栄村にも、比較的大きな集落遺跡が存在することが分かり、村の歴史をひも解く上で、重要な発掘調査事例であると考えられます。



調査区遠景（西より）